

資料館だより

第 2 号

昭和59年 2月 1日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市中藤6343 TEL 0425(60) 6620

武蔵村山市の庚申塔

資料提供

武蔵村山市郷土の会

1. はじめに

武蔵村山市には、いつの頃からか神や、仏を表わす文字や、像を刻んだ石柱が、道端に多く残っています。

その一つ一つから、古く村人達が人生の浮き沈みを乗り越えた物語を、それとなく後世に伝えているように感じとれます。おそらく良きにつけ、悪しきにつけ、目に見えない力にすぎることによって、心の安らぎを求めたのでしょう。

道端の石仏に合掌することは、右手の仏心と、左手の己が心を一にする意味と言われておりますが、多くの民間信仰の源は、自然の力を素直に認める生活心情に根ざしたもののよう思われます。

細田山の三猿塔（分布図 No.6）

矢ノ海道をはさんで後ヶ谷戸運動場の反対側に細田山と呼ばれている低い山がある。

山中には武蔵村山市の文化財に指定されている二基の庚申塔が祀られている。写真の庚申塔は高さ 61 cm、幅 28 cm の駒型石で、正面上部に日月瑞雲を配し、間に「庚申供養」と刻む。塔の中央に岩座の三猿を大きく浮彫りにして、その下に下田茂兵衛以下 8 人の名前が刻まれている。塔の右端に

「享保元年十一月吉日」、左端には「武州多摩郡山口領村山三つ木村」と刻まれている。

この庚申塔は、地元でもあまり知られておらず、めったに人が入らない山中にどのような理由で建立されたのかは今だにはっきりしない。



市指定文化財 細田山の三猿塔

2. 庚申信仰について

60日に一度めぐってくる庚申（かのえさる）の日の晩、夜を徹して長寿を願う信仰がある。これを守庚申（しゅこうしん）、または庚申待（こうしんまち）という。その起源は、人の身体に住んでいる三尸虫（さんしのむし）が常にその人の行為、善悪、過失を監視し、60日に一度めぐってくる庚申の夜、人が眠っている間身体から抜けだし、天に昇ってその人の罪過を天帝に報告するという。報告を受けた天帝はその人の罪状によって命を取ったり寿命を縮めたりするというのである。

そこで三尸を除去する方法がいろいろ考えられ、その代表的なのが、庚申の日の夜を徹して三尸虫が天帝に罪を訴えることをできないようにすることが最善の方法であるとされたのである。

これは中国の道教の三尸説で、わが国の庚申信仰の源流となっている。

日本で庚申の日に徹夜の行事が始められたのはいつごろであろうか、はっきりしたことはわからないが、比叡山の慈覚大師が記した「入唐求法巡礼行記」に次のように記してある。

『承和五年（838）十一月二十六日庚辰 夜人皆ねむらず 本国正月庚申の夜と同じである。』

つまり、庚辰の夜ねむらないのは、わが国の庚申の夜と同じであるという意味のことが書かれているので、この年より前に庚申の行事が行われていたといえるようである。それは平安時代前期、九世紀始めごろである。

平安時代の庚申行事は主として宮中や貴族のあいだで行われていたもので、「西宮記」、「栄華物語」や清少納言の「枕草子」などから庚申の夜の様子がうかがえる。それは庚申御遊・守庚申・守三尸などと称し、娯楽的要素の強い庚申行事であったようである。

鎌倉時代に入ると庚申行事は武士たちの間に波及していったのである。鎌倉幕府の公の記録である「吾妻鏡」に

『建暦三年（1213）三月大十九日庚申 天晴 今夜御所で庚申を守られる御会あり』

とあり、御所で行われた庚申の行事には多数の武士が参加していたことが記されてある。

さらに室町時代になると一般庶民の間でも行われるようになった。この時代に建立された庚申板碑などに庚申結衆の銘文が見られるからである。庚申の行事が

一般庶民の間に広まったのは、たぶん密教系僧侶や山岳修験者等の指導によったものと思われ、そのやり方も仏教色の濃いものになっていったのであろう。つまり庚申縁起がつくられ、礼拝本尊が定まり、講的な結衆が組まれてきたのである。こうして平安・鎌倉時代から貴族・武士の間で行われていた、いわば中国的な守庚申から大きく変容して、仏教化された庚申待が一般庶民に広められるようになり、このかたちがほぼ現代まで伝わっているのである。

江戸時代に入り世情が安定し、それを背景として庚申信仰が最盛時代を迎えるのである。そして礼拝本尊として青面金剛と三猿が登場し、庚申塔の主尊としても圧倒的な人気を得て、全国に普及していった。

江戸時代中期以後、庚申信仰は民間のいろいろな信仰と習合しつつ、明治・大正と衰えずに続けられたが、太平洋戦争を境にそのやり方は簡略化され、「話は庚申の晩に」といわれるくらい雑談と食事だけで過ごすところが多くなっていった。しかし、昭和55年の「庚申年」には庚申講の復活が行われたり、また新しく講が結成されたりして、庚申信仰がみなおされてきているようである。

庚申信仰の対象としての庚申塔は、江戸時代を中心に全国各地で建立されている。この庚申塔は像塔と文字塔に大別され、像塔の中で最も多いのは青面金剛像を刻んだものである。この塔には三猿を合せて刻むものが多く、武蔵村山市においてもこの青面金剛・三猿を刻む庚申塔が特徴的なものとなっている。

青面金剛は室町時代の「庚申縁起」の中に礼拝本尊の一つとして上げられていることから見てもその出現は古い。伝尸病（結核病）予防治療を祈る仏としての青面金剛に、三尸の駆除を祈願したのであろう。



3. 武蔵村山市の庚申塔

現在、市内には、21基の庚申塔が確認されております。その分布の状況は、第1図のとおりであり、また代表的な庚申塔の形は、第2図に示したとおりです。

ここに紹介する庚申塔は、市内最古のものと、市の文化財に指定されているものです。

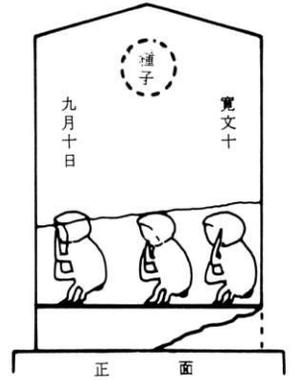
岸・猿久保の庚申塔 (写真1 分布図No.1)

市内で最古の庚申塔が、岸・猿久保の尾根の道すじに建てられている。高さ55cm、幅28cmの板碑形の庚申塔で、上部に種子が見えるが風化していて判読ができない。

写真で見るとおり、下部には、「み猿、いわ猿、きか猿」の三猿が、全部左を向いている姿が刻んである。他の多くの庚申塔を見ても、三猿全部が同じ方向を向いているものは大変珍しい。塔の右端には「寛文十」左端には、「九月十日」とかろうじて拓本によって判読できた。また、三猿の下にも、人名が刻まれているが、やはり風化のため判読が不可能である。



写真1 岸・猿久保の庚申塔



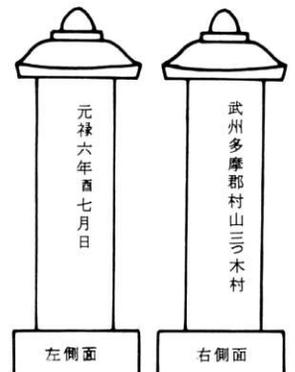
細田山の青面金剛塔 (写真2 分布図No.7)

細田山の山中に、三猿塔と並んで笠付型の庚申塔が建てられている。高さ72cmの角柱正面に、合掌六手の青面金剛が浮彫りされ、右側面には「武州多摩郡村山三つ木村」と刻み、口をふさいだ猿が刻まれている。左側面には、「元禄六年酉七月日」と刻まれ、ここには、目をふさいだ猿が、刻まれている。さらに、塔の裏面にも「白布山慈眼寺持之師山代造立」と刻まれ、耳をふさいだ猿が刻まれている。この他に塔の正面下部には、15名の人名が刻まれている。

裏面の銘文から、慈眼寺が造塔に介在していたことがわかり、貴重な石造文化財である。



写真2 細田山の青面金剛塔 (市指定文化財)



大日堂の庚申塔 (写真3 分布図No.21)

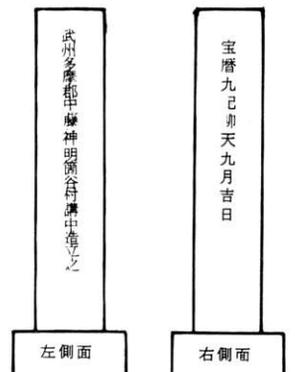
神明ヶ谷戸の大日堂墓地入口に、市指定文化財の庚申塔が祀られている。高さ92cm、幅37cm、厚さ19cmの駒形石で、正面上部には、日月瑞雲が刻まれ、最下部に、三猿が配されている。

中央には、六手の青面金剛が浮彫りにされており、写真ではわかりづらいが、右三手が、三又鉾・矢・剣を握り、左三手には、宝輪・弓・ショケラを持っている。

庚申塔の右側面には「宝曆九己卯天九月吉日」、左側面には「武州多摩郡中藤神明箇谷村講中造立之」と刻まれている。



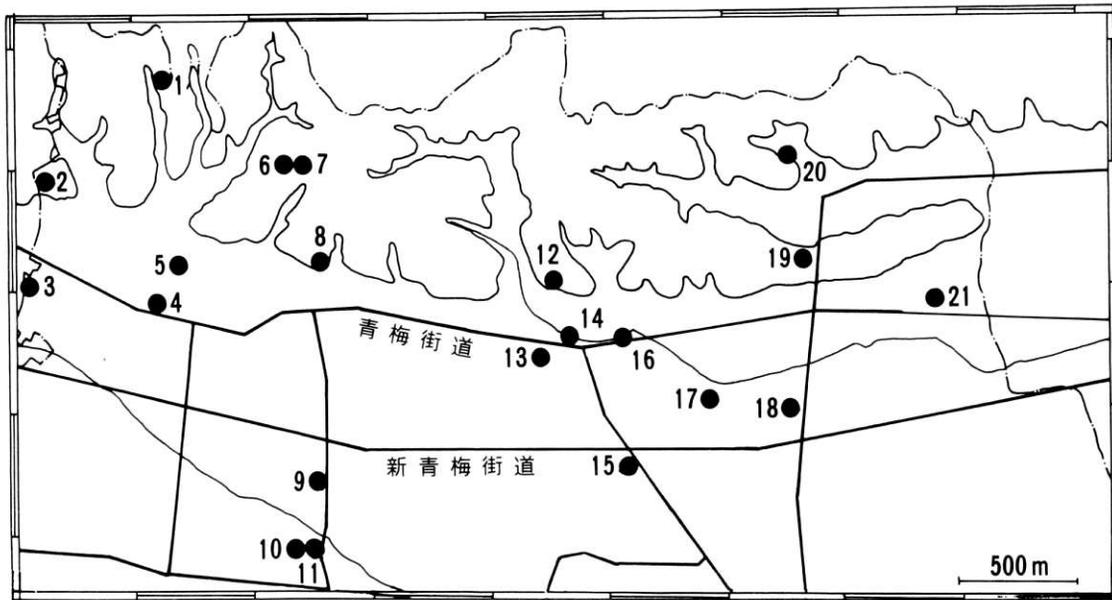
写真3 大日堂の庚申塔 (市指定文化財)



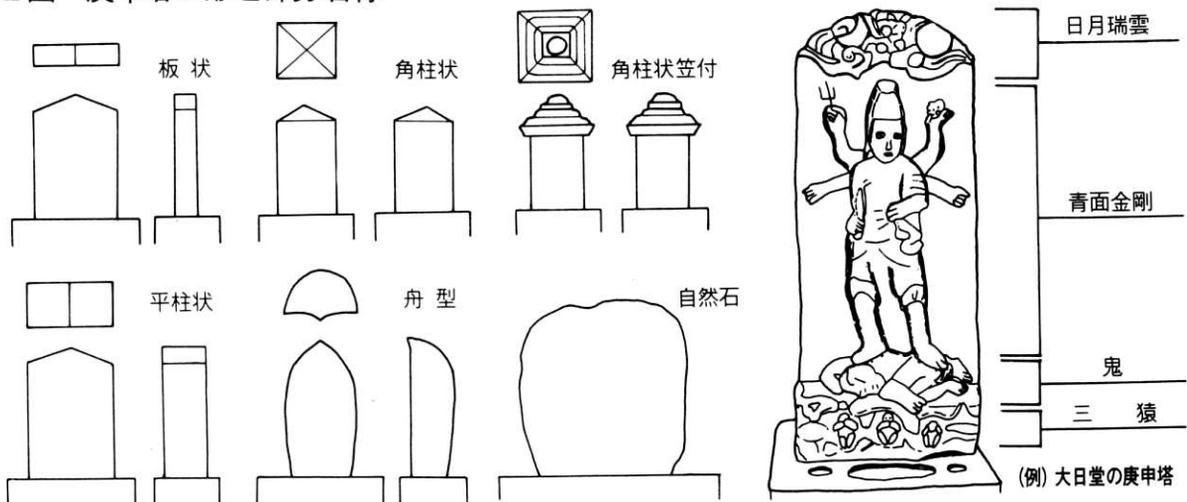
武蔵村山市の庚申塔（年代順）

年号	分類	塔形	備考	分布図番号
(西暦) 寛文十(一七六〇)	像塔 (三猿)	板状		1
元禄六(一六九三)	像塔 (青面金剛・三猿)	角柱状	市指定文化財	7
享保元(一七二六)	像塔 (三猿)	板状	市指定文化財	6
享保十四(一七三九)	像塔 (青面金剛・三猿)	平柱状		12
元文五(一七四〇)	像塔 (青面金剛・三猿)	舟型		8
寛保元(一七四一)	像塔 (青面金剛)	角柱状		17
寛保三(一七四三)	像塔 (青面金剛・三猿)	笠付		11
宝曆四(一七五四)	文字塔 (奉納庚申供養・三猿)	角柱状		10
宝曆八(一七五八)	像塔 (青面金剛・三猿)	角柱状		4
宝曆九(一七五九)	像塔 (青面金剛・三猿)	平柱状	市指定文化財	21
天明三(一七六三)	像塔 (青面金剛・三猿)	平柱状		16
天明六(一七六六)	像塔 (青面金剛・三猿)	平柱状		5
寛政十一(一七九九)	文字塔 (庚申塔・三猿)	角柱状		15
文化四(一八〇七)	文字塔 (庚申塔)	角柱状		3
文化四(一八〇七)	像塔 (青面金剛・三猿)	角柱状		19
文政三(一八二〇)	文字塔 (庚申塔)	角柱状		9
天保十五(一八四四)	文字塔 (庚申)	角柱状		2
嘉永元(一八二八)	像塔 (青面金剛・三猿)	平柱状		20
万延二(一八六一)	文字塔 (百庚申)	自然石		14
元治元(一八四九)	文字塔 (庚申・三猿)	自然石		18
元治二(一八五〇)	文字塔 (庚申塔)	自然石		13

第1図 武蔵村山市の庚申塔分布図



第2図 庚申塔の形と部分名称



(例) 大日堂の庚申塔

吉祥山遺跡の 確認調査を終了して

吉祥山遺跡調査団長 橋口尚武

吉祥山遺跡の確認調査は、4次にわたる調査を終え、やがて発行される報告書をもって完了する。その詳細は、報告書に委ねるとして、本稿では、調査結果に基づき、吉祥山遺跡の全体像を中心にその概要を述べておきたい。

1. 吉祥山遺跡の調査

吉祥山遺跡の存在と重要性は早くから知られ、狭山丘陵を代表する遺跡として受けとめられてきた。それは、規模が大きくて、出土遺物も多く、先史・古代の狭山丘陵や武蔵国の歴史を再現するのに欠くことのできない遺跡であると考えられていたからである。

これまでの調査の中で、最も古い発掘調査は昭和32年に行われた北多摩高校生有志による調査であろう。一説には、昭和20年代に、すでに発掘調査が行われていると言われているが、現在、その記録はない。

次いで、昭和37年、桐朋学園社会部による調査が行われ、縄文時代中期の住居址2軒が検出されている。この結果は「村山町史」において、その概要が述べられている。

最初の本格的な調査は、昭和38年、東京都教育委員会による北多摩北部文化財総合調査の一環として実施されたものである。この調査は遺跡内の吉祥院墓地の拡張に伴う緊急調査であり、縄文時代中期の住居址及び弥生時代後期の住居址、各1軒を検出している。調査の結果は、昭和41年発行「北多摩北部文化財総合調査報告」—東京都教育委員会—として報告されている。

昭和52年、再度の吉祥院墓地拡張が計画され、遺跡が破壊される危機に立たされたため、武蔵村山市教育委員会によって組織された吉祥山遺跡調査会が発掘調査を行った。この調査は3年間にわたり、墓地拡張部を中心に縄文時代中期の住居址5軒、後期の住居址1軒、弥生時代後期の住居址1軒、古墳時代後半の住居址1軒等を新たに発掘調査し、先土器時代から平安時代までの遺物を多数発見した。この調査結果は、各年度ごとに武蔵村山市吉祥山遺跡第1・2・3次調査詳報として武蔵村山市教育委員会より発行されている。

近年、武蔵村山市も東京のベッドタウンとして開発が進み、狭山丘陵南麓においても開発の手が延びてき

ている。そのような中で、吉祥山南側の一段低いテラス部も昭和54年に宅地として開発され、また、北側の林の一部が開発業者の手にわたるなど、吉祥山遺跡の存在自体に危機がせまりつつある。

このような事を背景として、武蔵村山市はもとより狭山丘陵としても貴重な吉祥山遺跡を保護・保存することを目標に計画されたのがこの確認調査で、昭和55年度より4年間にわたって行われた。

この調査は、遺構の拡がりりと各時代ごとの遺物の検出に主眼を置き、遺跡の全体像の把握に努めたため、4年間にわたり設定された調査区は遺跡全域に総数34ヶ所にのぼる。また、その範囲は、台地の傾斜部や意識的にくずされたと思われる窪地にまでおよんだ。なお、調査面積は、昭和52～54年度に行われた調査分を含めると、遺跡推定面積の約15%となる。

いずれにせよ、破壊を前提とした発掘調査の横行する中、希少価値と成りつつある学術調査でもあったと認識している。

なお、昭和54年の宅地開発に伴って、東京都教育委員会により緊急に調査が行われ、古墳時代前半の住居址が1軒検出されている。

2. 吉祥山遺跡確認調査の成果

武蔵村山市中央の北の台地上に位置する吉祥山遺跡は、狭山丘陵の南麓にもあたり、市街化区域内にあるものの緑豊かな地域に存在する遺跡である。

昭和55年度から始った3次にわたる確認調査では、この緑を念頭においたもので、原則として雑木林の保存にも力点をおいたものであった。従って、調査は樹木をよけながら実施された。遺構の確認についても遺物の分布状況や土層から判断することを最優先し、その時期や性格が把握できなかったものもあるが、住居址については耕作や盗掘による攪乱された部分を中心に掘り進め、その中で、時期の判定や前後関係を明らかにしようと努力した。そして、ある程度の判断材料を得ると、あとは、そのまま埋め戻してある。

確認調査第4次では、3次までの調査結果を踏まえ、縄文時代晩期の住居址を確認し、その住居址内部の保存状態を把握することを目的とした。

以上の目的にそって行われた確認調査の成果を、昭和52～54年度調査分の成果を含めて時代ごとに説明すると以下のようなようである(全体図参照)。

先土器時代

墓地部において、ナイフ形石器・石槍類が検出され遺構は確認されないまでも、吉祥山遺跡最古の遺物である。

縄文時代

早期：野島式土器を出土したファイヤーピットの検出があり、また、遺跡全域より貝殻条痕丈系土器が出土した。

前期：A地区を中心に、数は少ないが確認されている。

中期：B～D地区にかけて150m×50mの規模をもつ環状の定型集落を形成する住居址25軒を確認、総推定軒数は100軒近い。遺構・遺物ともに遺跡中最大規模である。

後期：確認された住居址は3軒で、遺物分布はC地区の林を中心にほぼ中期の集落範囲と一致する。

晩期：遺構の検出はなかったが、C地区の林を中心に、遺物の分布が認められた。

弥生時代

中期の遺物は確認されず、後期の住居址3軒（うち1軒は、昭和38年東京都教育委員会が調査した住居址）を確認した。

古墳時代

前半：住居址5軒を確認するが、1ヶ所へ集中せず台地峰部を通る農道に沿って分布する。また、遺物も住居址周辺に若干検出された。

後半：確認住居址は5軒。住居址に伴う遺物は豊富であるが、住居址以外からの出土は少ない。

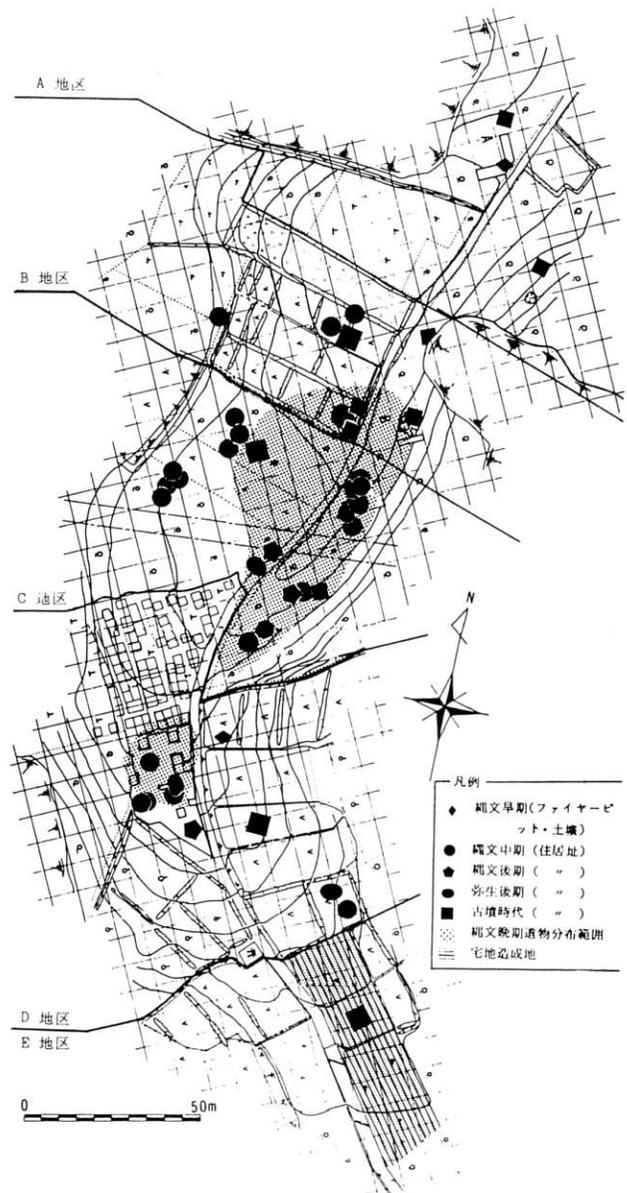
奈良・平安時代

遺構の検出は無い。また奈良時代に相当する遺物は出土していない。平安時代の遺物としては、C地区の南側を中心に布目瓦が散布し、墓地部より坏（小鉢）の完形品1点が検出された。

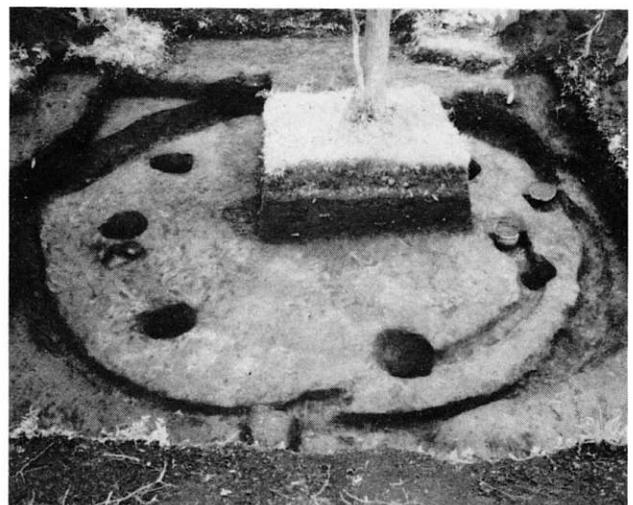
3. まとめ

以上の成果を見ても判るとおり、遺物の全く見当たらない期間が数時期あるにしても、吉祥山遺跡は先土器時代から平安時代までの複合遺跡であり、特に縄文時代中期の集落や、晩期の遺物、荒川水系の最西端に位置する弥生時代の住居址、平安時代の瓦などが特徴的である。それに加えて、これらの遺構のほとんどが破壊されずに保存されていることも重要で、狭山丘陵及びその周辺地域において、これほどの遺跡が残されている例は他にない。

いずれにせよ、この吉祥山遺跡が武蔵村山市に止まらず、狭山丘陵周辺域さらに武蔵国の歴史を解明する上で非常に重要であり、その保存方法等について、慎重かつ真剣に取り組む必要性を痛感している。



吉祥山遺跡全体図



確認調査第4次において発掘した縄文時代中期住居址写真

写真で見ると

今と昔 写真展から

資料館では、昭和58年6月から市報や社会教育だよりの紙面を活用し、広く市民の所有する写真の提供をお願いしてまいりました。

この結果、現在まで158点にも及ぶ貴重な写真資料の提供をいただきました。これらの写真は、市内の風景や建築物の写真が中心ですが、中には山口貯水池の建設工事風景や、関東大震災当時に発行された絵はがきなどがあります。

風景や建物、年中行事などを被写体とした写真は人物写真などと比べ、案外撮影される機会も少なく、また残りにくいものであり、そうした写真自体も貴重な文化財です。収集した写真は保存、整理し広く市民に公開したいと考えております。

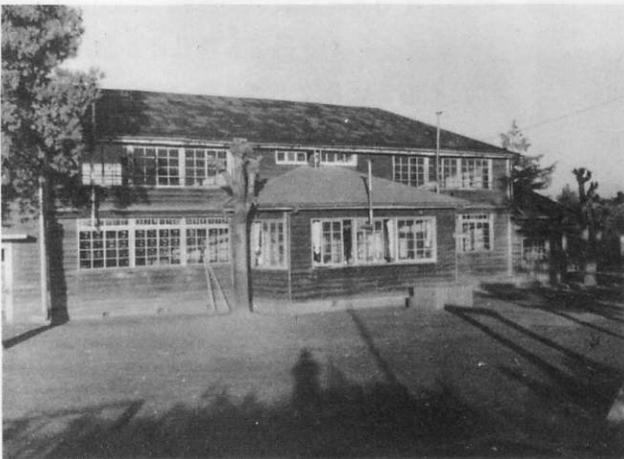
昨年の11月にこれらの写真を整理して、「武蔵村山の今昔」と題し、写真展を実施しました。この中からいくつかの写真を紹介します。



新青梅街道建設



青梅街道横田周辺



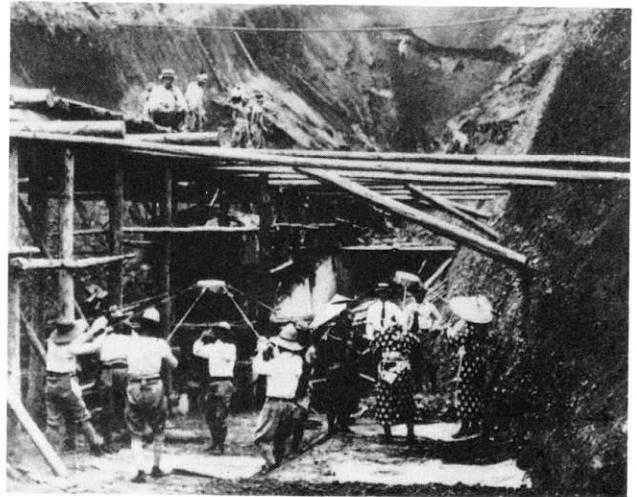
第一分校（現第三小学校）校舎



第二分校（現第二小学校）校舎



田中の稲荷（中藤バス停南）



山口貯水池提防工事

写真資料提供者

次の方々より写真資料を御提供いただきました。御協力ありがとうございました。

古川基一氏	中藤3878-4
満尾信寛氏	立川市羽衣町2-2-18
内野達郎氏	中藤522-1
水越忠治氏	三ツ木551
荒井奥民氏	残堀5-21
村山美春氏	瑞穂町箱根ヶ崎248

お願い

資料館では、引き続き「武蔵村山市の歴史を伝えるような写真」を収集しています。

これらの写真は、後世に伝える貴重な資料とし、目録を作成するほか、折をみて、写真展を企画するなど広く市民に公開しております。

是非ご協力をお願いします。なお、写真のご寄贈が無理の場合は、一時借用し、複写後原本をお返ししております。

寄贈資料

次の方々より、貴重な資料を御寄贈いただきました。大変ありがとうございました。

峯岸 清二氏（神明2-69-1）	
板碑	1点
比留間正好氏（残堀2-2-1）	
糸おさ	4点
おさ	1点
くるり棒	1点
糸染め機	1点
緯緋返し	1点
ざぐり	1点
山田 博氏（中藤1086）	
おさ	10点
三條 和男氏（三ツ藤1-44-2）	
書籍	22点

お知らせ

＝作品展＝

資料館では、昨年10月に行った縄文土器づくり教室で、子どもたちがつくり上げた作品を展示します。

日 時 昭和59年3月4日（日）から

3月25日（日）まで

ただし、月曜日、15日は休館日です。

＝映画観賞会＝

資料館では、次のとおり文化財映画の観賞会を行います。

日 時 昭和59年3月25日（日）

第1回 午前10時30分～午前11時30分

第2回 午後1時30分～午後2時30分

第3回 午後3時～午後4時

映 画 村山大島紬
黄八丈